

番がついに来たうれしさの余り、タラップをどうして登ったか記憶がない。ナホトカの港では赤旗で見送られたように思う。だまされどうした幾年瀬、飢えと寒さと過酷な労働の日々、祖国日本への帰り道は余りにも遠かった。

国敗れて俘虜となり、恥ずかしき思いで帰った。しかし、これはまことか、狐にでもだまされているようだ。またソ連から引き戻されるのではないか、復員者にとつて今も、また生涯忘れることのできない悪夢だと言うべき体験であろう。

ああ、懐かしく忘れがたき祖国よ、故郷よ、我れ生まれし日本よ、このつたなき俘虜体験の叫びを子孫への申し伝えとして残しておきたい。皆さまへの祈りとしてペンを終わる。

ソ連抑留苦闘記

和歌山県 入山 敏一

昭和二十年九月初旬、本隊はチチハル兵器廠第二六三五部隊に終結。十月中旬、作業第十三大隊江口佐の指揮下に入り、ハイラルより満州里へ。大休止二、三日の後、幾日かを経てトオリンスカヤという所についた。もちろんその当時は知るよしもない地名、一面雪の野原で凍てついている山の中で、真夜中のことであった。

宿舎一つあるでなし、溝が掘られて薪が投げ込まれていた。ソ連兵が来て火をつけて溝の両側で野宿だ。寒くて寒くて寝られたものではない。外気は氷点下十度だ。不寝番が交代で薪をたき暖とす。翌朝、健康な者は伐採、身体の弱い者はソ連兵の言うがままに宿舎づくりにいうことになった。

これがシベリア生活の始まりとなり、それから後のことは、推して知るべしである。毎日二人一組で「ノルマ

「ノルマ」で日が暮れて、食事は黒パン一片七十グラム一食分、または飯盒のふた一杯の、水気が多くてシヤブシヤブコーリヤンがゆ、それにスープと称して岩塩の塩汁、掛け盒一杯くらいであった。

約十日ばかりたつて宿舎らしきものができた。雌松の直ぐいものを組み立て、縄で結び、仕上がりである。丸太の上での寝起きである。そのころからぼつぼつ栄養失調が原因で死人が出始めた。伐採中に気を失いかけて頭を振ったり、顔を叩いたり、意識を取り戻しながら「ノルマノルマ」に追いまくられての毎日だ。

立木の大半は雄松で、根元が太く、腹ばいになって肩を入れて担ぎ上げ、積み上げねばならない難作業の連続で、息をするにも胸が痛くて苦しい。このころより我々も、栄養失調の初期というべきであろうか、皮膚をつまみあげると元に戻らない。それほど体力的に疲労が累積して、極度の状態にあった。それはその収容所における捕虜全員の姿であり、苦しみの毎日であった。

ある日のこと、夕方、作業の後片づけ仕舞いを一人で行っていたとき、突然白馬に跨がり、一見立派そうな軍人

で、胸にたくさんの略章をつけた人物が現われ、大声（ロシア語）でわけのわからぬ怒鳴り声を上げ始めた。

それゆえ私が手真似で、後かたづけが悪いためか、または木の切り方が根元が高いので悪いのか、不明なので、途方にくれていたときに、馬上より拳銃を発射し、誤って自分の馬の首を射ち抜いてしまった。そのため自分もんどり打って転げ落ち、はね飛ばされて、びっこを引きながら去って行ったが、お蔭で私は助かり命拾いをしたのであるが、今でもあのと何と言われて怒鳴り飛ばされたのか、私にはわからない。

いずれにしても私としては、運に恵まれていたのかも知れない。宿舎に帰って戦友達に話したのだが、本当にする者はだれもいなかった。それは無理からぬことで、私以外に目撃者はいなかったからだ。しかし後日になって、だれ言うとなくうわさとして流されたこととして、収容所長某大佐が豚箱に送られたというのを耳にした。そのわけは、我々捕虜の糧秣をピンはねして地方に売却し、私利を満たし金もうけに走っていたことと、自分の乗馬を射殺した罪の件が重なり、中央の知るところ

となり、最高の刑に処せられたということである。その後、新しい収容所長が派遣されて来たが、作業の厳しさは相変わらず「ノルマノルマ」の毎日。

そのようなある晩、夜中に私が便所に行く途中に知ったことであるが、旧日本軍将校と軍医とのヒソヒソ話を耳にしたのは、ノルマを上げるために、「栄養失調のために働きの悪い者は注射で死なすよらない、悲しい手段であるがやむを得まい」という話だった。まことにひどいことで、私はそれ以来、もし病に倒れても、決して注射だけは打たせないと心に定めたものだ。あの当時、強度の栄養失調になれば、あっけなく自然死ということでも処理されていたようで、我々の山ではこの病で数えきれないほど死んでいった。

そんな苦しい生活の中で半年余りの伐採中、一番大仕事をしたことがある。私にとっては大変な作業であったと思う。作業はいつも二人一組で、朝七時開始、一本の大木を切り倒すのに約二メートルほどの鋸を六本も取り替え、六時間半かかってやっと仕上げた。確か午後一時半ごろであった。横に倒れた木の太さに驚嘆したが、そ

の大木も二メートルずつに寸法切りするのだが、倒した木の横に立っても相手の頭も顔もみえないほどだから、想像できると思う。白樺で踏み台をつくり寸法切りするのだ。

枝も大木同様にして仕事を終えたつもりで、歩哨に尋ねても未だ聞き入れられず、「駄目だ積み上げよ」と叫ぶ。そのときは夜の十時ごろであったように思う。やむなくドンドン火を燃やし続けて、ない体力を尽くして懸命に必死の作業を終えたのが翌朝四時過ぎであった。積み上げた丸太の上に座り込んだまま動くこともできず、放心状態であった。やっと正気に戻って隣の木を伝って下に降り、疲れ切った身体を引きずって宿舎に帰り、一睡はしたものの、一日の休養もなしに、また伐採に参加するのだ。

我々は奴隷ではない。このように使い捨てに、食も十分に与えられず、「死ねば死ね式」のやり方が当時のやり方であった。そこには国際法の規定もなければ、人間としての道も何もない、地獄の生活そのものと言うべきソ連での捕虜の毎日であったと私は証言する。

その後、痔を悪化させ、歩くにも股を開いて歩かねばならず、大便も立便しなげな状態になり、診察の結果、入院と決まり、隣村へ移された。しかし事実には病院ではなく、薬一服も与えられず、早速に軽作業という名目だけの農作業に従事させられ、食事も何ら変わるものでなく、ただ、ここでは何かの動物の血でつくられた血粉のコーリャンとかゆを食べさせられた。これはまことに生臭くて食べられたものでなかったが、命を保つために無理して食べたお蔭で、体力もついでかなり持ち直したように思えた。

これからまたまた他の地区に次から次へと移され、最終はチタの収容所に行き、吉田大尉の指揮下に入った。ここでは大きな工場で働くことになったが、私に對しての収容所では本職である理容師として散髪をせよと言われたが、男の意地、日本人として「露助」の頭など刈れるかと言つてのけた。さすればたちまち幹部の態度が一変して、工場内で最も厳しく苦しい仕事をやらされることになってしまった。鋳物塊の三つ山を大づちで砕き、かまに入れてやすいようにする仕事。

また、湯流しといつて、バケツ状の重い容器を二人で担いで型に流し込む仕事。外は氷点下四、五十度であっても、工場内湯流しの仕事は上半身裸でないといふ危険で、大火傷または死につながる。思えば私のような細腕でよくやれたものだといまさらながらゾッとする思いだ。

その次は、砂ふるいといつて、製品を取り除き、砂をふるって翌日の仕事の作業準備をしておくことであつた。これとてやさしい仕事ではなかつた。もちろん相変わらずの食料の不足のため、飢餓状態は続いていた。

そのころから洗脳教育が盛んとなり、時には役員達からつるし上げされ、追い回され、疲れた体力の上に罵倒される者の悲哀を味わされたものだ。

その時期に、ちよどれんが工場の応援要員として約三十人ばかり行くことになり、そこでの作業は粘土をれんが状に切つたものを坂下から押し上げて上部のかまに入れ、焼く者と運搬仕事として、れんがを二人でトラックに積み込み、これを停留所まで約千メートル余りの線路わきに降ろし、そのかわりとして石灰やコークスあるいは新を元のトラックに積み込むために、一日に十往復

すなわち二十回通い歩く作業だ。

二人組でやる作業であるために、相手がもし病弱者であれば大変で、次第に全体の作業負担が重くなり、肌の色もあせて、皮膚も老人のものごとく張りのないものになって来ていた。この作業を三か月ばかりで切り上げざるを得なくなり、工場内での運搬作業に振り替えられたが、またまた洗脳教育に直面、みなに歩調を合わせマルクス・レーニンの崇拜者のように見せかけ、本音を出さないよう懸命に努めたものだ。

私の知人で、元将校の方に、それとなく本心を出したら損だと話していたのだが、せっかくナホトカの乗船地まで来ていながら、本音を出したために、また奥地へ送り帰されてしまった。年長の方であり、可愛想でたまらなかつたが、その後無事で帰国されたことやら、そのとき、心に残ることであった。

多分十月末ころであったと思う。ソ連の民間人たちから「ヤポンスキー、ハラショー、ダモイ、オーチンハラショー」と知らされたが、幹部たちは何も言わないので、だまされ続けて来た私たちには計りかねて、信じよ

うともしなかつたものの、内心では心動くものがあつたことは事実だつた。

いよいよ帰るときの通知、いわゆるソ連流の民主主義というか、寸時も気を許すことのできない厳しいもので、貨車に乗せられ夜間発車。昼間は停車することに指導部員が車中に来て、個々に話しかけては、反動分子の摘発に余念なくやっきになっていたものだが、我々は先様の言うとおりに話は合わせてはいたが、本音を出さず、要領よくごまかしておして来たものだが、彼らの行動を見聞してきたあの時、港からまた奥地に送られた方々の姿が今も目の当たりに浮かぶ感じだ。

ソ連のチタ収容所で結局は帰国ということになったのであるが、当時は何という感動もなく、今思えば不思議なくらい何も感じなかつた。それは周囲への気遣いもあつたからかも知れないが、私がソ連から無事帰り得たのは、「自分の気概」と、かろうじて生きられたことのもつとというべき「野草アカダ」のお陰と信じている。